

特集

祝 東京パラリンピック銀メダル獲得！

小松市初のメダリスト誕生

東京パラリンピックのボッチャ競技混合ペアBC3で銀メダルを獲得した、田中恵子選手とアシスタントを務めた母の孝子さん。快挙に至るまでの挑戦の軌跡をたどります。

問い合わせ

スポーツ育成課 ☎24・81339

マッシュルームジャパンの快挙

ボッチャ競技混合ペアBC3（運動機能障害・脳性まひ）で日本初のメダルを獲得した日本代表の3人は、揃いのマッシュルームカットから「マッシュルームジャパン」とも呼ばれています。世界ランキング7位の日本は、強豪国に勝るとも劣らない戦いぶり、見事銀メダルを獲得しました。メンバーの一人として出場した田中恵子選手は、各試合の第1エンドに登場し、長い距離でも目標球にピタリとつけ、また持ち前の輝く笑顔でムードメーカーとして、パラリンピック初出場ながらチームの勝利に貢献しました。

ボッチャとの出会い

ボッチャとの出会いは17年前。どんな障がいがあっても楽しめるこの競技で「勝つ喜び、負ける悔しさ」を知った恵子選手は、すぐにのめり込んでいったといいます。ボッチャを勧めてくれた中空清江コーチの指導の下、充実感を覚えた恵子選手は練習を重ねました。

それまでは消極的で外に出たがらなかった恵子選手も、競技を通して仲間が増え、どんどん社交的になっていきました。

母との二人三脚

母の孝子さんがアシスタントとなったのは10年前。孝子さんは「始めた当時は失敗ばかり。ある時コーチからアシスタントも道具の一部」と言われ、恵子がやりやすいように動



▲長年指導してきた中空コーチ



不可能を可能に

ボッチャの技術を身につけるのに苦労した恵子選手。自信が持てるようになったきっかけは「ロングボール」という強みを身につけたことでした。8年ほど前から、9m先の目標球に寄せる練習を朝から夕方まで繰り返し習得。今も欠かさずその練習を行っているそうです。

また、以前は右手が動かせなかった恵子選手は、毎日右手を動かす訓練を続けたところ、だんだん腕が上がるようになり、右手で投球できるようになったそうです。「自分でもびっくりしました」と語る恵子選手の、勝負にかける強い意志が不可能を可能にしました。



写真：SportsPress JP/アフロ

集まる支援の輪

東京での開催が決まり、恵子選手と孝子さんに支援者の輪が広がりました。競技用具を購入するためのクラウドファンディングでは、たくさ

んの方の協力により目標額を上回る支援金が集まりました。また、代表内定後は地元企業のサポートが得られることになりました。

1年の開催延期を経て

コロナ禍で、集まって練習する機会は大きく減ることになりました。しかし、ビデオ通話機能などを使って気持ちや課題などを全員で共有することで、チームに一体感が生まれました。

集まって練習できない分は、それぞれ独自で補い、母娘2人の練習は9時から16時まで行いました。父の学さんや兄の均さんも2人を支え、家族4人が協力して金メダルという目標に向かいました。



写真：西村尚己/アフロスポーツ

「最後まで笑顔で」

大会前、孝子さんに言われた「笑顔で終わって帰ろう」という約束を胸に、恵子選手は初の大舞台でも笑顔をやさず、2人の力を合わせて大きな栄光を勝ち取りました。市ではその栄誉をたたえ、恵子選手、孝子さんに市民栄誉賞を、中空コーチにスポーツ栄光賞を贈呈しました。



写真：西村尚己/アフロスポーツ

INTERVIEW

偉業を達成したお二人に、今の思いを語っていただきました。

——銀メダルを獲得した気持ちは

恵子 私活躍で少しでも明るい話題になってよかったです。3人で力を合わせたことでメダルが取れたと思っています。

孝子 メダルを取れてうれしく思います。少しホッとしています。

——競技中どんなことを考えていましたか？

恵子 私が出るエンドは1点でも多く取れるようにしたい。あとは楽しく伸び伸びというプレーをしようと思いました。

孝子 今までの国際大会とはレベルが違うのにビックリしましたが、いつも通りにやればいいと自分に言い聞かせました。

——最後に応援した市民の方にメッセージをお願いします

恵子 応援していただきありがとうございます。これを機に少しでもパラスポーツに興味を持ってほしいです。

孝子 皆様の応援のおかげでメダルを取ることができました。本当にありがとうございました。